

ホームページ <http://www.nihonkanpoukyokai.com/>

E-mail: [j.kampo@jeans.ocn.ne.jp](mailto:j.kampo@jeans.ocn.ne.jp)

# 日本漢方協会通信

2021年 7月

## 会長任期6年を終えて

一般社団法人 日本漢方協会  
今井 淳

会員の皆様、賛助会員・理事役員・講師の先生方・関係する多くの皆様。今年6月を持って会長の任を辞することになりました。6年3か月の長きにわたり会長の任を勤めさせていただきありがとうございました。私が日本漢方協会（以下、日漢協と称します）の会長の任をいただきましたのは2015年（平成27年）3月でした。おりしも日漢協は経営難に陥りいつ解散するかの憂き目にあっていました。副会長でも、常務理事でもない単なる理事でありました私が会長に任命されて再建を託されることとなりました。

再建にはいくつかの課題を解決しようと思いました。その一つ目は会の収支です。この会の収入は主に賛助会員のサポートと、会員の年会費、受講料でまかなっておりました。理事会の賛同を得て、早速、賛助会員には46年間の据え置いてきた年会費の約倍額の値上げをお願いしました。また最も大きな収入源である受講料は数十年ぶりに値上げすることをお願いしました。理事会では受講料の値上げは受講生の減少につながるとの反対の意見もありましたが。実際には受講生が増え驚きました。会員にはお友達等会員増加の協力もお願いしました。その結果でしょうか。会員・受講生の心に打たれました。収入を増やす方法と同時に支出を減らすために、理事役員にはわずかな手当でだったのをさらに減額していただきました。これらのことで少しは経営を立て直すことができました。その他、役員が外部で講演などで行っていただいた講演料、町役場等からのいただいた委託金なども収入としました。

その二つ目は法人化とエンブレムの設定でした。これらは外部への会の信頼性のためには重要なことであり、いずれも日漢協が創立して以来45年間の夢でもありました。これまでは日漢協は漢方好きの同好会だと言われ寂しい思いをしていました。それを法人化したいと願う多くの先輩先生方が苦勞されてきました。何とか手続きをすませ平成28年6月17日に日漢協は「一般社団法人 日本漢方協会」と新生できました。法人化による社会的信頼性向上の一步でした。次に、これも昭和45年創立以来の念願でしたエンブレムの制定を心掛けました。理事会員から募集した図案より、日漢協を赤青の上下2本のラインで囲ったデザインをエンブレムとして採用し平成28年9月16日制定しました。

日漢協を外部にPRするためのアイテムとしての重要なものはインターネットのホームページおよびパンフレットでした。このパンフレットを30年ぶりに刷新しました（平成31年2月22日）。

その三つ目は、外部からの資金調達を図ることでした。やはり法人化しますと世間の日漢協に対する信頼性を高める等、外部の目が変わってきました。早速、新潟県阿賀町から「過疎地域ビジネス確立事業 阿賀町漢方を活用した食品開発委託」（平成28年9月1日～29年3月29日）の依頼が来ました。早速協力することとしました。黄柏はぎ、茯苓付き、食養生講演、料理教室、阿賀町薬草散策、野草料理のレシピの開発、テキスト本

の発行。など会員からの参加協力もあり、実施することができました。勿論、阿賀町からの委託金の収入が日漢協にありました。その成果の一つに阿賀町に「奥阿賀創生事業株式会社」を設立し、黒米や自生薬草を商品化する事業を興すことができ、過疎地の地域創生に役立つことができました。大学との連携では新潟大学工学部に香蘇散製剤の精油成分の分析依頼、また、新潟薬科大学とは漢方薬のLPS研究など共同研究もできました。

同時に文科省研究機関登録を申請し、文部科学省科学研究費助成事業の機関番号を取得し、日漢協は文科省より研究機関として認定されました（平成28年10月7日）。これに基づき2件の科研費取得を試みました。1件は関東学院大学 矢嶋道文教授のご指導で平成29年度文科省科研費申請「貝原益軒『大和本草』に見る薬種・製剤・臨床一文化史学・本草学・製剤学の総合研究一」。もう一件は阿賀町役場との共同で農水省へ「平成29年度薬用作物等地域特産作物産地確立支援事業」を申請しました。しかし、残念ながらいずれも落ちてしまい科研費の獲得にはいたりませんでした。次回へ望みを託しました。

漢方の原料である生薬栽培については重要な課題の一つです。そのため外部との連携活動として、渡辺賢治先生が主催する一般社団法人漢方産業化推進研究会に理事会の賛同のもと平成29年2月20日に入会し活動を続けています。

その四つ目は内部の充実でした。日漢協は「日本漢方を復興し漢方の正しい知識を広く普及する」ことを理念として昭和45年に創立されたものです。したがって漢方総合講座が命です。傷寒論・金匱要略を中心とした古典及び現代漢方トピックスの講義は秋葉哲生先生を講師団長とする日本における漢方の最先端でご活躍の35名の先生方に依頼しています。また漢方基礎理論および生薬講座には理事及び学術委員が担当し研鑽に努めました。さらにその内容を充実させるために基礎および生薬についてはテキスト作成を試みました。また学習体位を8年サイクルとすることとし、検討を始めました。

本講座は座学だけではなく、実技として薬草園青空研修会及び漢方薬局製剤実習を毎年充実させて実施し、本講座の特徴としてきました。秋には漢方学術大会を開き会員の研鑽発表会としてきました。漢方を学ぶには良き師につき、漢方友達を作ることと言われます。そのため分科会を充実させました。従来からある初級者、傷寒論、本草、薬用植物観察、漢方雑学の4分科会に加え、平成29年より新たに薬局製剤、漢方食養、薬用植物栽培の3分科会を新たに開設し、会員相互の親睦を深めることにも役立っています。薬局製剤についてはリーダーの育成をも目的として薬局製剤学会を立ち上げ研鑽に務めました。

受講生の資格制度として「漢方相談師」の認定制度を29年より制定しました。漢方総合講座を4年受講された方には『准漢方相談師』、8年受講された方には『漢方相談師』の資格を認定しました。また、学術委員・理事を6年以上経験した役員には役員退任後に『漢方学術講師』の呼称を付与することにしました（令和3年6月）。いずれも自己研鑽の目標としていただければと考えています。

学術研究機関の証として『日本漢方協会学術雑誌』の発刊を平成30年に予定しましたがまだ未完成の状態です。一日でも早くの発刊をしたいと考えています。

令和2年（2020年）は日漢協創立50周年となりました。記念式典の実施を計画しましたが、おりしも新型コロナ渦となり、式典を中止せざるを得ませんでした。しかし、50周年記念行事として11月の漢方学術大会を50周年記念学術大会とし、開催することができました。国内での大きな学会が中止されている中、ラインを駆使した運営を成功させた協会役員の先生方の素晴らしいパワーを感じました。これで日漢協も安泰だと感じました。これに伴う『50周年記念誌』を会員の努力により発行できましたし、さらに『改訂4版実用漢方処方集』を発刊できました。

この6年間で私にとっては多くのことが実施できたと考えています。これはひとえに役員理事会員の皆様の多大な協力と高い技術力があってのことと考えます。優秀なスタッフに囲まれ幸せな6年間でした。まだまだやり残しは多くあります。しかし、おかげさまで日漢協の解散だけは免れたと思っています。深く感謝申し上げます。ありがとうございました。一般社団法人日本漢方協会が益々日本漢方のために発展されることをお祈り申し上げます。